

大陸発の文学の未来

“メイド・イン・アフリカ”の可能性

栗飯原文子

21世紀のアフリカ文学の世界的な流行は大陸の外での現象としてとらえられがちである。その裏返しとして、アフリカ大陸がこの潮流から置き去りにされているという指摘もなされる。大勢の作家が欧米にわたり、欧米の有名出版社から作品を出版し、欧米に居住する読者に読まれているという事実があるからだ。しかしそれだけでは現状を十分に語っていることにはならない。むしろ、大陸内部で湧き起こっているさまざまな活発な動きこそが、アフリカ文学の現在の隆盛を支えていると言える。

本発表ではいかに大陸の内側で、そして内側から、新しい文学を生み出し、流通させようとする努力と実践がなされているかということを中心にしたい。主に出版、文芸アクティヴィズム、デジタル・プラットフォームという点から、大陸内部から発信されるアフリカ文学の現状の一断面を考察する。

アフリカの出版事情

アフリカの出版分野、特に教育関連書籍の出版は、独立以降も旧宗主国の外国企業に牛耳られていた。むろん対抗措置はとられ、1970年代にはセネガルやタンザニアなどで政策の一環として出版社が設立される。国家主導で文化事業の推進と教育の普及が図られ、読者層が拡大したという成果も見られたが、1980年代から90年代初めにかけて、深刻な経済不況と外貨不足が大きく響き、多数の出版社が衰退していった。

この困難な状況のもとで、逆説的にも革新的な小規模独立系出版社が誕生し、集合的・パンアフリカ的なアプローチを志す動きが現れ始める。とりわけ1989年のAfrican Books Collective (ABC)の設立は現在にも続くインパクトをもたらした。ABCの成功を受けて、2001年にはフランス語圏でAfrilivresという組織も創設された。

21世紀の幕が開けると、それまでの経験や協力関係を踏まえて、新しい世代の出版活動が成熟していく。ケニアのBinyavanga Wainainaが中心となって2003年にKwani Trustが設立され、ナイロビを拠点に「文学ハブ」として存在感を増した。時を同じくして2002年、南アフリカで芸術・文化・政治を扱う雑誌Chimurengaがカメルーン出身のNtone Edjabeにより創刊され、複合的なパンアフリカ文化・政治プロジェクトとして展開されていった。

これらの先鋭的な取り組みが21世紀の出版の新時代を切り開いたのは疑いえない。こののち独立系出版社のみならず、独創性に富んだ、多種多様な文学プロジェクト、ネットワーク、運動体が続々と誕生し、現在のアフリカ文学シーンの第一線を担い、出版と流通の状況を変革しようと奮闘している。

新時代の独立系出版社

大陸で読者人口を増やし、豊かな読書文化を築こうと、2000年代から数々の新しい独立系出版社が設立されてきた。まず名を挙げるべき先駆けはナイジェリアのKachifo出版とその文学レーベルFarafinaだろう。Kachifoは2004年の創業以来、Chimamanda Ngozi Adichieを筆頭に、ナイジェリアやその他アフリカの有名作家の作品を手掛けてきた。ナイジェリアで同様に重要なのは、2006年にBibi Bakare Yusufが設立したCassava Republic Press。2016年にはイギリス、17年にはアメリカにも進出し、ロンドンとアブジャにオフィスを構えて成功を収めている。

独立系出版のブームの中心となっているのは、やはり大国のナイジェリア、ケニア、南アフリカである。特筆に値する出版社をごく一部ではあるが紹介しよう。自身も作家である南アフリカのColleen HiggsはModjaji Booksを2007年に設立、南部アフリカの女性作家の作品を扱っている。ガーナのAma Dadsonは2017年にオーディオブックに特化したAkoo Books Audioを創業する。モザンビークのSandra Temeleは2018年にEditora Trinta Zero Novoを立ち上げ、英語やフランス語からポルトガル語への翻訳、様々な言語からモザンビークの主要四言語への翻訳を中心に出版をおこなっている。なお、Bakare Yusufやこの三人からもわかるように、いま、アフリカの文学と出版界を支えている多くは女性であることも指摘しておきたい。

文芸・出版アクティヴィズムの挑戦

出版に携わるうえで、ビジネス面での成功が重要だという見方に同意しながらも、完全な商業出版に徹するのではなく、プロジェクトや運動体として活動を展開するうえで、出版を重要な位置づけにしているケースが目立つ。出版、文学賞、文学祭などのイベント、ワークショップを掛け持ち、または、事情に合わせて、それらのいずれかに絞って活動を続けるグループは文学と読書文化の発展において重要な役割を担ってきた。

ウガンダのWritivismは「自立的なパンアフリカ文学インフラ」となることを目指し、作家のBwesigye bwa Mwesigireら三人が始めた文学プロジェクトである。首都カンパラで2013年からWritivism文学祭を開催してきた。直近の開催は2019年であったが、年に一度の文学賞は継続し、「ウガンダ人でさえウガンダの文学を知らない」と言われるほどの状態であったところ、ウガンダをアフリカ文学発信の一拠点にまで引き上げた功績は大きい。

南アの作家Rachel Zadokは短篇小説集としての賞が存在しなかったことに目を付け、2013年、Short Story Day

Africa をケープタウンで始動させた。毎年テーマに沿った作品が募集され、一冊のアンソロジーが編まれている。

これら文学プロジェクトが主催する賞以外にも、大規模なものからウェブベースの小規模のもの、国内向けの賞からパンアフリカの視野を持つ賞、SF作品の賞など、実に多数の文学賞が運営されているほか、大陸のあらゆる場所で多様性溢れる文学祭が開催されている。有名なところで、2013年に Lola Shoneyin が始めたナイジェリアの Ake Arts and Book Festival、2019年に Yvonne Adhiambo Owuor らが立ち上げたケニアの Macondo 文学祭がある。

大陸各地で文学を推進するグループが、アクティヴィズムの実践としてワークショップやコンテストを積み重ね、無名の新人作家のデビューに貢献してきた着実な歩みは、文学の未来への投機となっている。どの物語が素晴らしいのかを決めるのはわたしたち、自分たちで自分たちのキャンノンを作るのだという思いが人びとを突き動かしてきた。出版人や運動体の柔軟な発想とたゆまぬ努力によって、これまでのアフリカ文学に関するパワーバランスを一新し、欧米の承認、出版、消費に依存してきた悪循環を断ち切る機運すら生まれている。

デジタル・プラットフォームの可能性

どのプロジェクトもそうだが、イベントやワークショップの開催が資金繰りや人手不足に左右され、すべての内容を継続できていないことは大きな課題であろう。その点、オンラインを中心に活動するグループやプログラムには強みがあるようだ。デジタル技術の発展とその積極的な活用によって、独立系出版社や運動体の希望と目標が実現可能に近づき、アフリカ文学のあり方までもが根底から変革されるようになった。

デジタル・プラットフォームは主として、①商業出版社の電子書籍、②文学批評・情報ブログ、③出版社／運動体のオンライン・マガジンの三つに分類され、これらはしばしば相互に協力関係を結んでいる。背景には、世界でもっとも急速にインターネットの普及が進んでいるアフリカの状況がある。以下、順に見ていきたい。

大陸の出版の問題として流通・輸送にコストがかかることが指摘されてきた。しかし流通をはじめ出版を取り巻く複数のインフラ上の問題が電子書籍によって部分的に解決されているようだ。大陸のモバイル機器での読書傾向に目をつけて電子書籍を販売する出版社が増加しており、自費出版プラットフォームも急速に成長している。

アフリカ文学批評・情報ブログは 2010 年代以降、もっとも広範囲に及ぶ影響力をもつようになった。情熱的なファンの個人ブログとして始められたのちに、絶え間なく進化を続け、ブログの域を優に超えてオンライン・マガジンや出版社の役割をも担い、一大文学プロジェクトと化しているものも見られる。

ブログから進化したウェブ媒体、次に触れるオンライン・マガジンによる、大陸内外に広がる作家・読者の共同体とグローバルな編集・出版体制の構築は、まさにアフリカ文学をめぐって現在進行形で展開されているもっとも画期的な事象である。なにより、欧米の出版社が真似できない斬新な実践の場となっているのは興味深い。

オンライン・マガジンは 2020 年代にも次々に出現している。なかでも注目されるのは、ルワンダ出身でナミビアに移住した期待の若手作家 Rémy Ngamije が 2019 年に友人と始めた *Doek!*。2020 年にケニアの Troy Onyango が創刊した *Lolwe* は文学、批評、写真の掲載を中心に無名の新人が出版できるプラットフォームを目指している。

オンラインならではの特徴を最大限に活かしているのが、2013 年に 22 人の若手作家によるコレクティブとして活動を開始した *Jalada Africa* だろう。特集号のカバーイメージに続いて、作品のリンクが置かれ、ビデオやオーディオ素材も駆使され、創刊以来、故意に挑発的なテーマを選んで、アフリカ文学の新境地を切り開いてきた。*Jalada* の射程は野心的で、ことさら魅力的なのは多言語の実験と冒険であり、アフリカ文学が当初から課題としてきた言語と翻訳の問題に焦点を当てていることだ。2020 年にアメリカを拠点に創設された *Olongo Africa* も文芸作品の掲載に加えて、翻訳に力を入れているプラットフォームである。*Jalada* と *Olongo* の実践は、マルチメディアが使用でき、文字数やページ数の制限もないデジタル・プラットフォーム特有の柔軟性によって叶えられる未来志向のビジョンであると言えるだろう。アフリカ文学がヨーロッパ語偏重であるという議論への応答になっているとともに、アフリカ文学コミュニティが夢見るパンアフリカ多言語空間が開かれている。

おわりに

オンラインであろうとオフラインであろうと、出版社や運動体、ネットワークが文芸と出版の推進に情熱を注ぎ、相互協力を惜しまず、自らの基準と審美眼を頼りに出版したいものを出版していること、そして独自の斬新なアイデアから読者層を広げ、新しい才能を発掘し、文学コミュニティ全体を活気づけようとあらゆる冒険を行っていること——それこそがなにも増してアフリカ文学の革新性と潜在力を物語っている。アフリカの作家と出版人たちは、アフリカの未来を作っていると同時に、世界中に物語の力と希望を見せてくれているのだ。

参考文献

- Bogoya, Walter et al. "Publishing in Africa from Independence to the Present Day," *Research in African Literatures* 44-2: 19, 2013.
- Carré, Nathalie. "From Local to Global: New Paths for Publishing in Africa," *Wasafiri* 31-4: 56-58, 2016.
- 粟飯原文子。「アフリカ文学が紡ぐ「いま」(第2回)「メイド・イン・アフリカの可能性：アフリカの出版の未来」『思想』, 2019年6月号。